

## ときめき座談会

# 男女共同参画情報誌『ときめき』アップデート!!

1988年に『ウィメン』として創刊された東久留米の男女共同参画情報誌。時代の流れに伴い現行の『ときめき』も新たな形が求められるようになりました。

今号では編集委員がさまざまな側面から、新しい男女共同参画情報誌の在り方について考えました。

### 参加者：『ときめき』編集委員

T：20代男性。出産を控えた妻と2人暮らし。今年4月から東久留米市民に。編集委員は今年7月から。

W：40代女性。夫と2人暮らし。東久留米市民になって約4年。今年7月から編集委員に。

M：40代女性。一人暮らし。「男女共同参画都市宣言」起草委員。編集委員歴4年。東久留米生まれ。

K：40代女性。夫と小学生の息子と3人暮らし。編集委員歴4年。東久留米在住10年。

H：50代女性。大学生の娘と2人暮らし。夫は単身赴任中。東久留米在住約50年。編集委員歴2年。

N：50代女性。夫、小学生、高校生の娘と4人暮らし。東久留米在住40数年。今年4月から編集委員に。

司会：70代男性。今年の3月に5年間続けた編集委員を卒業。

司会：最初にまず簡単な自己紹介と編集委員に応募したきっかけをお聞かせください。

T 結婚を機に、今年4月に東久留米市に転入してきました。ITエンジニアをしているのですが、仕事で男女共同参画や女性が活躍している地域に触れた経験から、東久留米市でも何か役に立てないかと思い、『ときめき』編集委員に応募しました。

W 4年ほど前に東久留米市に引っ越してきたのですが、転居後ほどなくして新型コロナウイルス感染症が流行し始めました。家でずっと仕事をしているので、東久留米にほとんど知り合いもいなくて、分からないことも多かったのですが、市の広報を見て応募しました。仕事や生活をする中で、男女の差というか、差別や区別を感じていたこともあって、男女共同参画に興味を持ちました。

M 今から20年以上前、男女共同参画都市宣言の起草委員として関わりを持ったのが最初かな、と思っています。とてもよい宣言文を作ったよ、ということ宣言の20周年でもう一度ちゃんと知ってもらいたいという思いがあって、編集委員になり、一昨年の「男女共同参画都市宣言20周年記念事業」にも参加させていただきました。

K 私は、男女平等推進センター主催の防災の講座に参加して、「防災にも女性の視点が必要なんだ」ということなど、色々と学んだことがきっかけで編集委員になりました。

H 東久留米には、小学校1年から住んでいます。ところが、何十年も住んでいるのに何も地元のことを

知らなくて、コロナによる外出自粛中に初めて市報をよく読み、『ときめき』の存在に気付きました。編集関係の仕事をやっているのですが、何か少しでもお役に立てることができたら嬉しいなと思ったのと、2001年生まれの娘との意識の違いがあまりにも大きくて、その辺りも埋めなければと思い、参加しました。

N 私も幼稚園からずっと東久留米に住んでいるのですが、市の取り組みや広報などにあまり関心がありませんでした。コロナ禍での外出自粛期間に、インターネットや携帯を使える世代は、出歩かなくてもいろいろな情報を仕入れられました。私の周りには、ネットも使えず買物にも出られず、必要な情報も集められなくてただ家にいるしかなかった高齢の方たちがいました。そのときに、やっぱりいろんな面で紙の媒体の力は必要だなあとすごく感じて、いつか地元ならではの情報誌を作れたらいいなと思っていたときに、ちょうど『ときめき』編集委員の募集を見つけました。初めは情報誌づくりのノウハウを学びたいという気持ちで応募したのですが、男女共同参画のことを調べ出したら、すごく自分の身近な、自分が関わっている問題にもいろいろと絡んでいることがわかって、面白さも感じ、今は自分も学びながらすごく楽しんでやらせていただいています。

司会：私も5年間編集委員を経験しましたが、メンバーの入れ替わりがあつて新陳代謝が図られるというのは非常にいいなと思います。これからどういう新しい『ときめき』になっていくのか非常に期待しています。

ただ、今年は『ときめき』の予算がちょっと削られるということで激震が走りましたね。編集会議でもいろいろと話し合われたと思いますが、市がデジタル化を推進する中で、今後の『ときめき』について、みなさんどんなプランを考えていますか。

M まず、『ときめき』の予算減額はまさに激震でした。これまで『ときめき』は、年2回、計8,000部発行していましたが、それが1回分、年4,000部の予算しか付かなかったという……。

市民がかかわる編集委員を一般的な仕事と同じ感覚で捉えてはいけないとは思いつつも、正直、冊数や印刷物としてのクオリティをイメージした上での予算なのかな、という疑念はあります。ただ、今は存在自体を見直すいい機会になったのかな、とも思っています。多分『ときめき』ほど市民の人の意見の濃度が高い行政発行の冊子はないんじゃないかな。ある程度の裁量を市民に任せてもらえているというのは、すごいことではあると思います。

K 市が昨年行った「男女平等・共同参画に関するアンケート調査」では、『ときめき』を「全く知らない」という人が74.2%もいました。『ときめき』は誰もが読むことができ、みんなに関係のある情報誌だと思うので、デジタル化やSNSなどの新しい取り組みを汲み取りつつ、ITについていけない、紙ベースでの情報が必要な方たちにも平等に効率よく認知してもらって、一人でも多くの市民に見てもらえるような情報誌を目指していかたい。予算の減額は本当に残念ですが、一歩前進するいい機会になっていると思います。

H 私は65号(2021年春号)で「男女共同参画都市宣言20周年」を特集したときから参加しているのですが、編集委員になるまで市が男女共同参画都市宣言をしていることも知りませんでした。全文を読んだらすごくいいな、と。ポエム的なところも含めて。一番いいのは「私たち」という一人称複数が使われている

るところです。他自治体の宣言は「みんなが～します」「〇〇区は宣言します」のように、行政側で内容を決めて「市民」と情報共有するような文ですが、東久留米の宣言は「市民」が主体になっています。「私たちは」で始まる 20 年前のこの素晴らしい宣言を土台に、時代に合わせて考え方を更新していく媒体として、この情報誌は絶対必要だと思っています。認知度が低い、存在価値はあるの？という庁内の意見があるとしたら、もっと力を入れよう、もっと予算を出すよってというのが筋で、認知度が低いから予算減額というのは全然逆じゃないの？というのが私の感想です。でも、確かにリニューアルするいい機会でもあるので、限られた予算で、より工夫した誌面にしていきたいですね。今、企画をいろいろと考えているところです。「東久留米は 20 年前にこれだけの宣言をしている」ということをもっと広く知ってもらおう活動ができたらいいな、と思っています。

N 私も含めてなんですけど、結婚して、子育てをして、フルタイムで働いているわけでもなくて……。そういう人の中には、『ときめき』や市の取り組みを知らない、参加したことがないという人も多いと思うんです。私は編集委員に応募して、初めて『ときめき』を読んだことがきっかけで、ものすごくいろんなことが一気に入ってきて、自分とは関係ないと思っていたことが、実は自分の生活にいろいろな形でかかわっていることをとても感じています。そういう風に初めて気付いたことなどがあつたので、自分の助けになるようなものが簡単に手に取れて、誰でもさっと読めて、ちょっとしたヒントで何かが変わる、それが何かのきっかけや助けにつながるような物を私も作れたら、やっている意味がすごくあると思っています。そのためには、なるべく多くの人に読んでもらえるような入り口をつくれたらいいなあと思っています。

T 『ときめき』の目的は、いろいろな人に男女共同参画を理解してもらうことだと思うので、これからいろいろな方法を考えていきたいと思っています。子どもたちは G I G A スクール構想でタブレットなどの I T 機器は持っているので、小学校にアプローチしてチラシを配布してもらって、QR コードで『ときめき』のページにログインしてもらおうというのも、雑誌でいう「手に取ってもらった」と一緒のカウントになると思うんですね。あとは I T 機器を使わない世代に対しては、もちろん紙の方が有効だと思うので、現状の予算の範囲で、紙でも届けていきたいという思いはあります。また、男女共同参画に関して、編集委員がちゃんと理解した上で届けるというのが一番大事だと思うので、機会があれば男女共同参画って何だろう？っていうことを編集委員で話し合って提供できたらいいな、と思います。

W 引っ越しの手続きで市役所に来たときに、たくさんのチラシをもらってきたんですけど、その中に『ときめき』がありました。私もそれまで興味を持って広報を眺めたことがなかったんですけど、市の検診を受けたくて必死に広報を見ていたときに、編集委員募集の記事を見つけました。検診のことしか考えていなかったのに、たまたま編集委員の募集を見つける、ということもあるので、インターネットでちょっと検索したらすぐに情報が分かるのもいいんですけど、自分が探しているもの以外の情報を幅広く知れるという意味でやっぱり紙媒体はいいな、という気持ちもあります。

だから、市民の人に広く情報を知ってもらったり、読んでもらいたいという場合は、やはりデジタルと冊子の両方がなくてはダメ、というかあってほしいという気持ちがあるので、予算減額の中でも評価してもらえるように頑張っていきたいなと思います。

司会：『ときめき』が20年以上継続しているということは東久留米の一つの文化だと言ってもいいと思います。それをこれからどう将来的に成長させていくか。今後デジタル媒体の中で『ときめき』がどのような特徴を出していくか、多くの人が見てくれるような情報を発信できるのかというのがこれからの大きな課題だと思うのですが、皆さんいかがですか。

M 「伝える」ということに関して言えば、編集委員として冊子の文章だけ書いていればいいということ自体に限界を感じています。

H 考えることは二つあります。一つは『ときめき』のQRコードを活用して、大人でも子どもでも、誰でも簡単にアクセスできるようにすること。もう一つ、一番大事なことは届ける内容、冊子コンセプトです。そこはやはりリニューアルする必要はあると思っています。

2001年生まれの娘なんかは、男女共同参画の男女っていう二元論にもものすごく違和感を持っていて、もっと包摂的に考えるべきじゃないか、と言っています。東久留米市はいち早く「男女共同参画都市宣言」をしたのに、その情報誌『ときめき』は停滞していると感じさせないように、もう一步踏み込んで、ジェンダー平等や、さまざまな差別問題も視野に入れた冊子というコンセプトでいけたらいいのでは？と考えます。

K 編集委員の中にもいろいろな意見があって、市民となるともっといろいろな意見があって。なかなか全部が全部、称賛される情報誌を作るのは難しいと思うんですけど、宣言にもある「人権」というのは男女とか関係なくみんなにあるものなので、それを軸に問題提起や情報発信をやっていけるといいな、と思っています。事件は現場で起きている訳で、月1回の会議だけでは限度もあるので、『ときめき』を飛び出す、一段上がるためには、出前講座などもお試しでできたらもっと幅が広がるんじゃないかな、と思います。

SNSの活用も市役所の他部署の人と相談しながら、情報誌だけというところから、ちょっと新たな試みをいろいろやってみたいという風にも感じています。

M 今まで、ちょっとないがしろにしていた部分というのが、フィードバックなんですよ。特集を組むにしても課題をどこから受け取ってくれば良かったかっていうところが曖昧になっていて。積極的に何らかのフィードバックを受ける状況を作っていけたらもっといいのかな、っていうのはここ最近感じたことです。

H 出前講座の話が出ましたが、例えば、「中学生と考える選択制夫婦別姓」とか「10歳からの性教育」のようなテーマで、中学生や小学生と編集委員と一緒にディスカッションして、考えて、その内容を紙面に載せる方法もあるかな、と思って。一緒に考えよう、っていう企画をやって、締めにはフィードバックする、そういうことをやったら面白いんじゃないかな、と思いました。

司会：そういったジョイントの形でやって、それを誌面に反映するというのもやる価値はありそうですね。

リニューアルを機に、冊子の名前を変えたらどうかという意見もありますが。

事務局：「ときめき」は平成6年に「ウイメン」から名称変更しました。当時の記事を見ると、「人生をときめいて価値のあるものにしていきたい」、「私の人生の主人公は私」、「自立して自分らしく生き生きと」、「そんな願いを持つ方々のために少しでも『ときめき』がプラスになったら」という思いで名称を考えたいようです。「ときめき」という名称で、男性が手に取りやすいか、という意見も耳にします。

K “ときめき”を辞書で引いてみると、「期待、心配、喜び、恥じらいなどの強い感情で、胸がドキドキすること」らしいです。いい意味だけではなく、「心配」などの意味もあるんですね。

M “ときめき”という言葉自体が、世代によってイメージが結構違うんじゃないかな、と思っています。それと、男女共同参画という言葉もそうなんですけど、時代によって変化してきていると思うんですね。『ときめき』というタイトルを付けたときと今とでは、言葉に込められた気持ちや思いも違う。いろいろな意味で、もう1回ちゃんと向き合わないといけないなと思います。

司会：『ときめき』編集委員として長く携わってきた我々としては『ときめき』というタイトルに思い入れはありますが、タイトルに特に先入観のない新しいメンバーの皆さんはどうでしょうか。

N 高校生の娘に聞いたら、「置いてあってもちょっとね、取るのが恥ずかしい」って言われました。若者に人気のアーティストの曲で「Tokimeki」という曲があるらしく、小学生の娘は、キラキラしたイメージともちょっと違うみたいです。私の世代では、男女共同参画という言葉で作っている情報誌としては、“ときめき”という言葉はちょっとずれているという気がどうしてもしていて。

今回の特集で選んだ本の中に「もしも差別のない状態であったとしても、人は今と同じような選択をするだろうか。固定観念や偏見のない社会で育ったとしても、私達の関心と適性は本当に今と同じだったのだろうか」という言葉があって、そういうことなんじゃないかとすごく思うんですね。男女とか、女性だから、っていうことではなく、まっさらな状態にして自分を積み上げていく、っていうきっかけや手掛かりになるような冊子という位置付けかなと私は思っていて、それは私の中のときめきという言葉とは違う。ときめきたいとか、ワクワクしたいとかキラキラとかではなくて、もっと強い自分のための一歩を踏み出すきっかけになるような意味のもの、そういう重いものなんだけど、それを分かりやすい形で多くの人に最初の一歩として手に取ってもらいたい、届けたいという思いがあります。

H “ときめき”というと、しなやかな女とか、自分が主役、みたいなやっぱり女性目線のイメージがあります。そうではなく、性別・年齢にとらわれない、すべての人がもっと自分の選択肢としてかかわるような土台を作っていく、重しになるような、その入口になるようなタイトルになればいいという意見に私も賛成です。ではどんなタイトルにするか、というと難しいですが、やはり私も変えた方がいいと思います。

W “ときめき”という言葉自体はインパクトがある言葉だとは思いますが、誰もが主役、というイメージとは違うかな、という気が私はして。輝く必要もないし、わざわざときめく必要も本当はなくて、そのまま生きていけば普通にいいんじゃないか、という気がしています。差別のない世の中と考える

と、男女のジェンダーだけじゃなくて、フラットに情報をまとめていく誌面かなと思ったので、もうちょっと決める時間を持ってほしい。

T “ときめき”という言葉に関して自分は特に抵抗はないんですが、男女平等っていう意味で考えるとちょっとズレているのかな、とも思います。皆さんのお話を聞いていると、編集委員の中だけでは決まらないような気がするので、アンケートを取って、いろいろな世代、いろいろな人の意見を聞いた上で決めるのがいいのではないかと思います。

M 『ときめき』に名称変更したころと今とでは、当初の男女共同参画で扱ってきた内容と、今、男女共同参画の中で扱っている情報の範囲が変わってきているのは確かですね。かつては性的マイノリティは男女共同参画にカウントされていなかったし、今は福祉の要素も入って来ていて、範囲が広くはなっているけど、よりぼやけているというか、境界線が無くなってきているというか。常に過渡期みたいな状況で、ちょっとでも油断すると置いて行かれちゃうから、いかに鮮度を保って、言葉と現状を結び付けていくかっていう部分がすごく大きな課題かな、とっていて。だから、タイトルにせよ、コンセプトにせよ、すごく長い目で見て、10年、20年先を見据えて言葉を選択しなくちゃいけない。

**司会：最後に、編集委員として、今後どのように関わっていきたいかお聞きします。**

T 発行部数については、ITの知識を生かして、紙だけではなくより多くの人に読んでもらえるようにしていけたらいいなというのと、唯一の男性委員なので、やはり男性目線でアプローチしていけたらいいなと思っています。

W 自分と違う環境で育ってきた人の話を聞いたり、人と出会ったりすることで、気持ちや価値観が変化する、ということを経験として知っているなので、もっと勉強して、いろいろな人の話を聞いて、そのことを誌面に反映させていけたらな、と思います。

N 今、介護と高齢者とジェンダー問題の絡みにすごく興味を持っています。見えない存在になってしまっていること、当たり前として社会に認識されていることが、実はもう当たり前ではなくて、そもそも男女平等ではない価値観から作られてしまっていることを、あえて文字に起こして、まず認知してもらうとか、そういうきっかけを作れるといいんじゃないかなと、それを楽しみにしています。

H 私は次世代に向けた記事を増やせれば、とっていて。例えば性教育や結婚制度など、従来の制度や考え方に疑問を提起するきっかけになるようなもので、小学生や10代、20代の方たちと一緒に考えるような企画ができればうれしいですね。

K 私は一市民として、市民に一番近い目線で、主婦として、母としてこの『ときめき』に、名前が変わっちゃうかもしれないですけど、今のところはときめきながら、かかわっていききたいなと思っています。

M この場に来てみたいと思われるような伝え方、一緒にやろうよ、という空気感が一番欲しいなって思

っていて。ここに来ると何らかの新しい情報が得られるっていう感覚で、少しずつ輪が広がっていくっていうのは、多分冊子の読み手の人にも同じように伝わっていくのかなって思うんですよね。だからすごく主体的に作れる冊子ではあるかなと思っています。

すごく課題は多いけれど、まずは自分たちが一番「楽しい！」って思えて、一緒にやろうよ、っていう空気が一番欲しいな、って。市の会議の中でも、一番楽しい会議体でいたい。それで、一番鮮度の高い会議体でありたいっていうのは思っています。

司会：ときめき編集会議はみんなの意見が飛び交って、自分の言いたいことは言う。それでも常に笑い声が聞こえる。そういった会議がずっと続いています。そういう雰囲気はやはり誌面にも反映されると思うので、これからも楽しい会議を続けて、楽しい誌面、市民の皆さんが評価してくれるような誌面になっていくことを期待しています。

今日は大変長い間ありがとうございました。

予算は減額となりましたが、編集委員が知恵を出し合い、今号から『ときめき』は、年2回発行は変わらず、全ページカラーになりました。

また市のホームページとリンクさせたり、誌面に掲載しきれなかった記事をQRコードから読めるようにしたり、従来以上の情報をお届けできる工夫を加えました。今後も誌面を通じて、皆さんに男女共同参画を身近なこととして考えてもらうお手伝いをしていきたいと思えます！